

Hoffmeister, Dufay, Lebedinsky 各氏の訃

古 畑 正 秋*

IAU 総会のあと、昨秋から今年はじめにかけて IAU 第21 (夜天光) 委員会の長老の訃があいついで報じられ暗たんとしている。つい数ヵ月前に各氏の元気な姿に接したあとだけにひとしおである。

C. Hoffmeister 教授はドイツのゾンネベルク天文台長であったが今年の1月2日、高齢でなくなられた。氏は実に長年のあいだ、変光星、流星、夜天光などの広い分野で、いかにもドイツ人らしいこまめさで、こつこつと研究をされ、幾多の業績を残されたので、かなり広い分野の天文学者によくその名前を知られている。

まず夜天光の部門では、1930年代に何度か中米など低緯度の地へでかけて眼視観測を多量に行い、黄道光および対日照物質の空間分布の研究を行っている。その結果、黄道光物質の主体は一つの回転楕円体ではなく、内外二部分よりなっていることなどを主張している。これらについての一連の論文は Astr. Nachrichten 誌上を賑わしている。これよりさき、まだ若かりしころ1910年代を中心にして、流星の観測を大量に行って、ドイツにおけるこの方面の権威とされてきた。主として流星の軌道について研究し、太陽系の流星物質の運動、散在流星の軌道など、たくさんの論文を発表している。このうち散在流星について、1948年に Meteorströme なる一著を出してまとめている。これよりさき1937年には一般的な流星物理学の著書 Die Meteore を出しているが、これはかなり広く読まれた本である。

変光星の観測者としても Hoffmeister 教授はよく知られている。1920年ごろから写真観測によって新変光星の発見につとめ、50年以上かかさずこの仕事を続けてこられたことは敬服のほかはない。毎年何百という新変光星を発見し、A. N. 誌上に恒例の発表を続けていた。しかもこれをかなりの高齢になるまで続け、その発見数は実に1万個を越えている。ほとんど個人の仕事として、これは余りにも偉大な業績である。

私は昨年 IAU 総会の際にはじめてお目にかかったが、いかにもそうした不屈の魂を、老顔の中に秘めているという印象を受けた。本誌1月号16頁にそのとき撮影した写真があるので見ていただきたい。

J. Dufay 教授は昨年11月6日、71歳でなくなられた。フランスのリヨン大学天文台長を永らく勤められたが、

最近勇退し、同天文台およびオートプロバンス天文台の名誉台長となっていた。主として夜天光の分光および偏光観測などを1920年代からやっており、ことに黄道光の偏光については最初の定量的な観測をしている。星野光から大気光までの広範な分光観測を行い、1940年代を中心に、多数の論文が出されている。大気光については、このころは初期の研究時代であったが、その主要な輝線の同定、強度の測定などの基礎的な部門について多くの貴重な仕事が行なわれている。そして1955年から1961年まで2期にわたり IAU の夜天光委員会の委員長として、この方面の指導的立場をとってこられた。

このほか、銀河系の中心部の赤外写真の観測、恒星間物質の研究など多彩な研究をしている。1954年には Galactic Nebulae and Interstellar Matter なる著書を出している。

A. I. Lebedinsky 教授の名前は天文学者の中にはあまり知られていないかもしれないが、ソ連の宇宙空間科学者として、ときどき日本の新聞にも名前が出ていたほどである。以前はレニングラードにおられたが、宇宙時代といわれるころからモスクワ大学の物理学教室の教授としていろいろな仕事をしている。人工衛星、月ロケットによる宇宙空間科学の研究のほか、IGY から IQSY にかけて、ソ連のオーロラないし大気光研究の指導者として活躍し、多くの論文も出している。昨年の IAU の総会では人工衛星による紫外部大気光の観測、月ロケットによる月面の紫外および赤外域の反射観測などの新しい結果を報告された姿がまだ目に残っている。



レベディンスキー教授夫妻 (1967年9月3日モスクワ大学のアパートで撮影したもの)

* 東京天文台

私が同教授にはじめて会ったのは1961年の京都でのIGY シンポジウムのときであったが、短身なれども巨漢、日本人間で豪傑とあだ名を呈したほどの押し出しに、いささか怖れをなしたほどであった。昨年夏IAU総会を終ってモスクーを訪れたとき、1日モスクー市やモスクー大学を親切に案内され、長い間抱いていた印象が一

挙にくつがえされた。やはりロシア人独特の性格であろうか。モスクーで別れたのが9月3日、それから5日して、9月8日に急逝されたとの報を受け、しばしばうぜんとした。モスクー大学内の同教授のアパートへ招かれたとき私が写した夫妻の写真が最後のものとなったようである。

新刊紹介

科学史 (体系日本史叢書 19) 杉本 勲編

(山川出版社, A5判, 494+49ページ, 定価 850円)

本書は日本科学史の総合的研究書で、序章科学の概念規定と日本科学史、第1章 東洋古代科学文化の伝来と展開、第2章 科学文化の空白と胎動、第3章 近世科学文化の開花、第4章 自主的科学文化—実学の興隆、までを杉本勲氏が、また第5章 蘭学勃興の諸前提、第6章 蘭学の勃興とその特質、第7章 蘭学の普及と発達、第8章 対外関係の危機と洋学、第9章 幕末の洋学、の各章を住藤昌介氏が執筆されて徳川時代末までの記述が終る。以後の諸章は明治以後現在にいたるまでの期間で中山茂氏が取扱っている。すなわち第10章 国営科学、第11章 科学技術の文化と発展、第12章 戦争への道、第13章 戦後の問題点、で本文が終り、最後に49ページにわたる索引、年表、参考文献がある。

本書の執筆者中の杉本氏、佐藤氏は共に国史研究家で

ある。杉本氏は現在九州大学教授で、国史家として日本科学史にも早くから探究の手をのばされ、法政大学通信教育部の日本科学史、単行本近世実学史の研究などによってその日本科学史観を早くから示しておられる。本書の杉本氏の執筆部分はこの日本科学史の論旨に従ってこの前著を増補されたものである。また佐藤氏は東北大学教授で、洋学史研究序説の著で著名な洋学史の研究家である。このような国史畑の方々、天文出身の科学史理論家の中山氏が分担協力して執筆された点が他書に見られない本書の特色であろう。しかしこの3人の執筆者の日本科学史観や方法論は必ずしも一致していないことが本書の弱点であるかもしれない。しかし私はこの点がかえって日本科学史研究上の問題点を指摘していると考えており、本書の持つ意義とも考えている。特に天文学史関係に多くのページをさいているものではないが、数少ない総合的日本科学史の一つとして会員諸氏に御一読をおすすめし、日本の科学とは何か、天文学を含めて、日本の科学研究を進展させる道は何かというような問題を考察されることを希望してやまない。(広瀬)

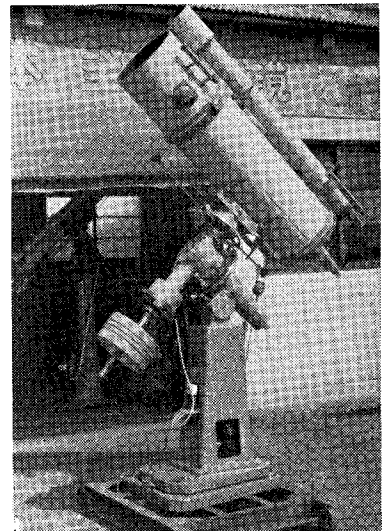
西村製の反射望遠鏡

- | | |
|----------|-------------------|
| 30cm “A” | カセグレン・ニュートン兼用 |
| | 10cm 屈折望遠鏡 (f/15) |
| “B” | カセグレン焦点 |
| | 15cm 屈折望遠鏡 (f/12) |
| 40cm “A” | カセグレン・ニュートン兼用 |
| | 15cm 屈折望遠鏡 (f/15) |
| “B” | カセグレン焦点 |
| | 20cm 屈折望遠鏡 (f/12) |

株式会社 西村製作所

京都市左京区吉田二本松町27
電話 (771) 1570, (691) 9589

カタログ実費90円郵券同封



30 cm 反射望遠鏡

ニュートン・カセグレン兼用